

# すすむし

Vol. 7 No. 4



倉敷昆虫同好会

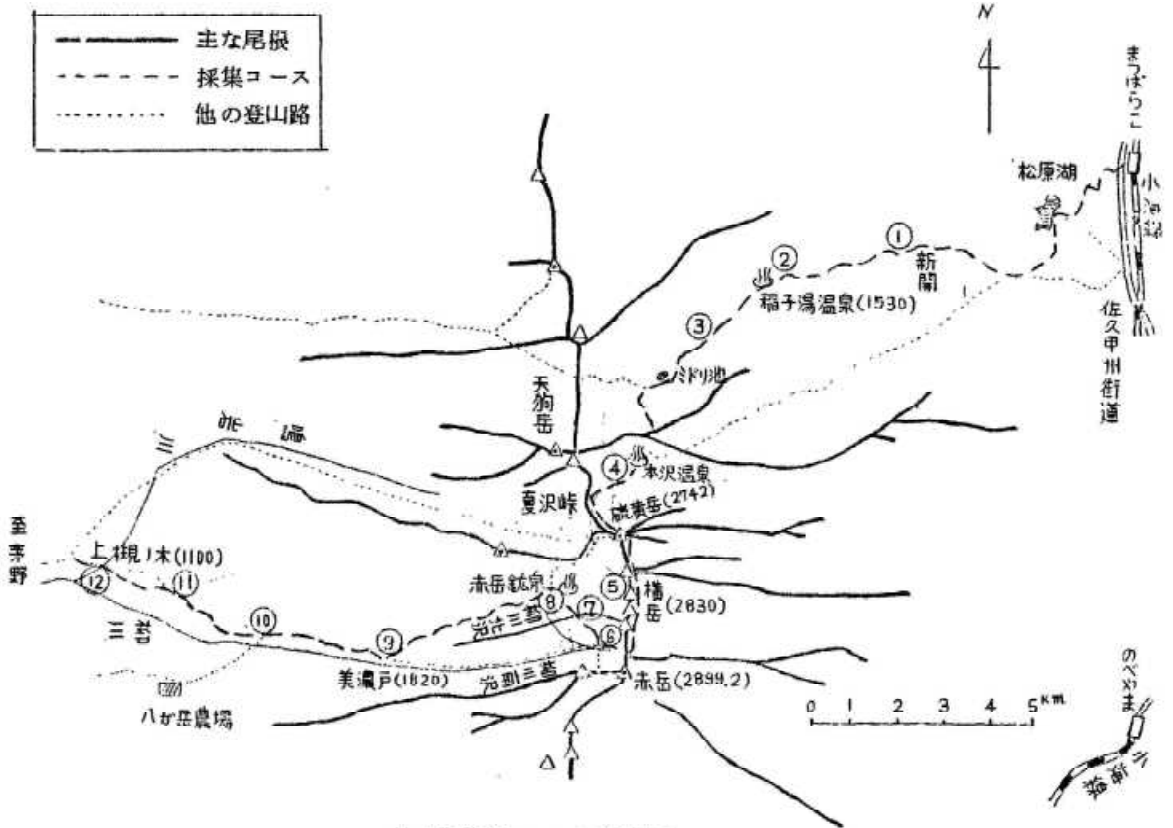
Dec. 1957

## 目 次

表紙デザイン	友野良一	
八ヶ岳採集記	船越俊平 青野孝昭	1
八ヶ岳採集品目録	風早保男 船越俊平 青野孝昭	7
明治後期における岡山の昆虫 相を知る為の一資料の紹介	青野孝昭	14
おどしぶみ		
○ 冬至の日にムラサキシジミ	安江生	19
○ 神庭の滝の甲虫二種	船越俊平	19
本会宛寄贈誌目録		19
編集後記		20

## 八ガ岳採集記

船越俊平 青野孝昭



八ガ岳採集コースの概略図

昆虫と高山植物の豊富なこと、そして、日本アルプスのように大げさな装備がいらなことが今回の旅行を私達に決行させた。八ガ岳の昆虫については既に多くの記録があり、それ以上に付け加えねばならない新しい記録は、この報告にはほとんど含まれていない。既知の記録の幾分かを確めながら、山を身近かに体験してることが私達のねらいだった。

一行は愛知県から船越俊平、船越妙子、岡山県から風早保男、風早知之、青野孝昭の5人。

1957年7月24日、名古屋を夜出発、稲子温泉、本沢温泉、夏沢峠、硫黄岳、横岳、赤岳山溪小屋、行者小屋、赤岳鉱泉、美濃戸、上槻木コースを踏破し、7月28日夕方、車中の人となった。

この採集行で得られた標本中、蝶において、東側産のものは西側産に比べて比較的雌が多いという傾向が認められ、興味深いことであつた。八ガ岳連峰の東側と西側とでは発生に早遅の差があるのかも知れない。

7月25日(才1日目)

昨日、倉敷を正午に出発した岡山組は名古屋で船越夫妻と合流、22時40分発の夜行列車に乗ったが、興奮した面持の登山者の大群におされて座席もとれず、床に新聞を敷いて喧嘩たると一夜を過す。

小淵沢到着6時14分。白いガスが次第に晴れば南アルプスが朝日に映えて美しい。ここには朝の落ち着いた静けさがあり、店先で飲んだ脂肪の濃い牛乳には高原の香がほのめく。

いよいよ小諸行列車に乗込み、まだ見ぬ八ヶ岳の雄姿を一刻も早く見たいものと期待はふくらむが、太陽は早や全天の雲にかくされて快活な裾野の展望はのぞめそうにもない。小淵沢を離れて5分もたたないうちにヒメシロチヨウが三々五々飛ぶのが車窓から認められる。まだ朝の7時過ぎ、いかにも弱々しい飛び方だ。列車は井出原、急場原、野辺山原と雄大な高原を進み、内地で最高の駅といわれる野辺山駅(海拔1346m)を通過、千曲川の川底目がけて速度を早め始めると間もなく松原湖駅に到着する。9時16分。

つゆ型気圧配置が異常に長引いて居座つた儘の為に空気が意外に冷たい。バスステーションで稲子温泉行のバスを待つ人々の間をナミホシヒラタアブが数匹、人影をさけながら飛んでいる。定期便のバス1台では客をさばさ切れず、貸切バスまで動員して3台のバスが同時に出発。こんなところに夏山をめぐる一つの断面がのぞく。1台の貸切バスには既に教師に引率された学生採集団が殆んどつまっていて、用意されたとりどりのネットがものものしい。先頭に行くバスの窓からは、驚いて、水辺から飛び立つた数頭の白い蝶が認められたがなんであつただらうか。

稲子温泉はハエの多いことをのぞけば、サービスの点では思ったより感じがよい。別館の離れ座敷で茶菓の接待を受けたあと、昼食、身軽になつて午後はバスで登つてきた道を行けるところまで降つてみることにする。

一番元気のよいのが小学6年の風早知之少年、真先に出掛けて既にマシジミを入手している。曇天のためか、採集者が多過ぎるのか、蝶の姿は本当にチラホラ。稲子温泉に程近いミズナラ群落には高校生が1人、つぎ高竿をもつて姿も見えないゼフィルスを見張っている。

草原性のゆるい斜面に優越するのはマシジミとヒヨウモン類。ギンボン、コヒヨウモンモドキは一見してそれとすぐわかるが *Brenthis* sp. は鱗粉がやや薄くなつてヒヨウモンチヨウかコヒヨウモンか見分けがつかない。

まもなくどやどやとせき込んで降りてくる中、高校生の一団に静かなブロンナードを妨げられる。彼らの1人が猛烈な勢でスジボソヤマキを追いかけネットに入れる。蝶が少なく、採集者の多過ぎることがさせたわざ、これが集団採集の悲哀というものか。

新聞部落に至らないうちに前日の睡眠不足も手伝つて疲労を覚え、生理的に甘い物が要求される。雲は次第に厚みを加え、雨さえ落ちそうな形勢に、14時過ぎ、そろそろ引き上げることにする。

桑島や路上に時々おりてとまるクジャクチヨウは中国地方に住む者には物珍らしい。知之少年はメスアカミドリの新鮮な1♀をネットにし、僅かながらゼフィルスも棲息していることがうかがわれる。しかし、その後、それと思われる樹をたたいてはみるが、反応なく、ウラゴマダラがあわて

て飛立つのに一度出合つたのみ。ここはゼフィの多産地とは言えないようだ。

16時頃稲子温泉に帰着。少しおくれて嵐早保男氏もオオミスジ、シータテハ等のみやげに現われる。

複雑な鮎物臭を感じながら入浴、泉質は弱含鉄泉で冷泉を暖めたものとか。夕食に出された鯉の刺身は美味であり、料理は食欲を増進させるが、出されただけのご飯では旺盛な食欲はいやされない。お代りを注文。満腹した豊かな気持で今日の採集品を整理、才1日目を終える。

7月26日(才2日目)

海拔1500mの稲子温泉は、さすがに涼しい一夜を提供してくれた。昨25日の疲れのせいもあって、よく眠れたが、雨だれのトレモロが、目覚時計の如くせわしい音を立てている。昨夜来からのゼフ探搜の気鋭もくずれてしまい重い気持である。船越氏一人出掛けたが、ネットがぬれてどうにもならず30分ばかりで引返す。この宿舎の辺りは昨日歩いてないのでblankとなつてしまった。

7時頃朝食を済ませたが、梅(?)のコリコリした砂糖漬は実に美味である。しかしながら雨は止みそうになく9時遂に出発を決意する。宿舎の人が、ちょうど合わせたガイドを紹介して呉れ、荷物も一部運搬を引受けて呉れることになり大助かりだ。

稲子温泉からの登山路は在来のものを進んだが、木材運搬のための立派な自動車路がかなり高い所まで続いている。この付近は藨木が多くなってくるが、下草も生い茂りアザミの花も雨にぬれて美しい。晴天ならばかなりの収穫がありそうだ。ショウマの花を探していた青野氏がハナカミキリをあげる。今日の才一号だ。やがて道は巨大なシラカンバの林の中へ入つて行く。雨にけむつた樹間から高山の香がただよい、しばしわれを忘れさせる所である。下草からぼつぼつ甲虫の収穫もある。登山路と交錯する自動車路がなくなる辺りから馬のひく林間軌道ができています。登山路はここから急にきつくなり行手に雄姿を見せていた天狗岳もいつか樹間に消える頃になると汗が流れ始める。この辺りから上はコメツガ、ツラベ等の大木が生い茂り道は薄暗く、枝からたれ下つた青白いサルオガセは神秘的である。緑池を右に見る辺りは、伐採路が縦横に走り、よほど道標に注意していないと方向を失つてしまう。私達一行も小さな道標を見落したためひどい目に合った。そこからしばらく下り道を進むうち、登り道となり小さな尾根を越える。登りきつた所にシヤクナゲの大群落があり一同感激の声をあげる。しかし船越氏がガガンボの一種を得た他は全く収穫がない。注意して見ると木の根が全部宙に浮いており面白い所である。10分ばかり下つたら稲子部落から本沢へ至る道に合流する。ここから本沢温泉まではわずかである。ザックを肩から降り靴を脱いだのが12時45分だ。スムーズに歩いていたらもつと早く着けたであろう。

この温泉の設備はかなり良く感じも悪くないので夏沢まで上つて宿泊しなくて幸いであつた。物価が高いのは高い土地だから仕方あるまい。別館に宿泊し食事を全部まかせたので1人700円ナリの宿泊費となつた。

昼食を済ませ一息つくと、張切つている知之少年に促がされて夏沢峠まで上る。晴天ならば素晴らしいであろう硫黄岳の火口壁は白いガスにかくされて、その下部をわずかに見せているだけであ

る。途中針葉樹の林の中の道には赤くて平たい石がたくさんあつたのは印象的で、カナカサと鳴る音が快い。いつしか雨が止み、南アらしい高い峰がいくつか雲海上に現われているのを遠望し明日の天気期待が湧く。峠付近の東面は針葉樹にまざってダケカンバが見られ、西面にはハイマツがあり、高山性の植物もかなりあるようだ。峠の小屋には、客引きをやっているものがあり甚だ不愉快である。風早氏はこの辺りで、かなり収穫をあげられたようである。雨は止んだものの相当強い西風があり木の幹がぐらぐらゆれている。こういう天候が多いためか峠の樹木の枝は東側に向つてよく発達している。帰路野天風呂に立寄り、付近のシヤクナゲの群落から、青野氏、船越氏等が甲虫を若干得る。カミキリ、ハムシの類である。登りに50分、降りに1時間30分を使つたが、宿舎で暗くないうちにと整理を急いだ。しかしあまりに少ない収穫である。

温泉に入つて汗を流したら急に今日の終りが近づいた。ランプの下で明日の希望を語る情景は、風早氏の傑作写真となつて残っている。

7月27日(才3日目)

5時起床。天気は予想通り今日も駄目。雨こそ止んでいるがガスに巻かれて視界は狭い。6時55分出発。コメツガ、シラベの樹林を縫つて急坂を登る。7時20分夏沢峠着。峠は昨日同様ひどい偏西風をまともに受けて、樹々はうなり、登山者の多くは思案げに、見える硫黄岳をにらんでたたずんだ儘。やまびこ荘も、駒草ヒユツテも縦走を見合わす人々であわただしい空気に包まれている。縦走の日に悪天候とは残念だが、他の一組のパーティと同じように私達も硫黄岳を登ることにする。

ミヤマハンノキ、ダケカンバの樹林帯、続いてハイマツ帯を過ぎると足元は砂礫地にかわる。濃いガスと暴風の為、パーティは密集、4・5m先きから見えてくるケルンが力強い励ましを与える。突風にふらつきながら岩陰にのがれて一休み、直ぐそばのミヤマシオガマに思わず張りつめた気持がやわらく。風早氏は可憐な高山性の草花を求めて休む暇もないが、悪条件の為、得意のカラー撮影は断念。

2742mの硫黄岳頂上にケルンは多いが横岳への道は迷い易い。視界のきかないガスの中を私達は無線ロボット気象観測所わきを通つてその儘、赤岳鉱泉への下り坂へ進んでしまった。しばらく行つてあまり急坂に気づきとつて返す。頂上に吹き当たる風は増々猛り、正面を向いては息もつまる。ゆるい坂を下ると横岳との鞍部、大ダルミに達する。ここにはタカネヒカゲが多いそうだが、硫黄岳石室をガスの中にべつしながら通過。すれ違ひのパーティと挨拶を交しながら身の安全を気づかい合う。

横岳の長い山陵には小ピークが並び、主峰は2830m、道は岩峰を越えたり、基部を巻いたり変化に富む。このあたりには連峰中植物も多種産しコマクサも認められる。そして、この山陵にはリスがいる。鹿もいるそうだが声は聞けても姿は殆んど見せないようだ。ツクモグサ、シコタンソウなどを探していた夫人はやがてオンタケクロナガオサムシを発見、意外の珍品を得る。

12時15分、赤岳山溪小屋へ到着、茶菓の接待に緊張感もほぐれて弁当。ストーブに手をかざし、ぬれた服を乾かしながら山を語る一時は楽しいもの。どこへ行つても10m先きを見逃せない

為、赤岳登頂は割愛、赤岳山溪小屋を13時に出た私達は少し引き返して行者小屋への急坂を下るザレた踏跡を落石に注意しながらゆつくり下るとやがてダケカンバ、ミヤマハンノキが現われ、道は落石の心配もいらなくなる。下るにつれてガスが薄れ、通ってきた横岳が時々、荒々しい岩峰をのぞかせたりする。

15時頃、行者小屋を通過。この附近は見逃せぬ所で甲虫類、ハナアブ類もぼつぼつ現われた。赤岳鉱泉に近くなるとシシウド、ショウマの花にハナカミキリが多い。赤岳鉱泉に着いたのは16時半頃だつたらうか。緑色のぬるい鉱泉につかると待望の夕食だ。ここは殆んどが雑詰料理だが、味噌汁とキュウリのサラダが新鮮な香りを放つて嬉しい。隣室には東京から来たパーティが休んでいて今日は美濃戸でミヤマシロを30頭程とつたとか。赤岳鉱泉は柳川北沢上流の谷間にあつて、下には美濃戸、泉野方面に蝶、甲虫類の好採集地をひかえ、上には硫黄岳方面の高山性昆虫の採集地をのぞんで絶好の根拠地となる。料金も安い。21時、ふとんを敷く。

7月28日(才4日目)

5時起床、昨夜の星空と明方の冷込みとで今日一日の天候に希望をかけて支度をす。八ヶ岳の採集も最後の4日目であり、今まで好天に恵まれなかつたので、一同今日こそはとの意強い。しかしながら窓外の梢のざわめきにいささか気をもみながらの朝食をとる。香り高い味噌汁をすすりながらはむ話の花にベニ、クモマベニ、ミヤマシロ等々が舞う。

出発前に東京のパーティから美濃戸付近の情況を聞くと、今年(1957)は全般的に蝶の発生がおこなれているためか、クモマベニは見られるがベニはほとんどいないとのことである。また泉野へ出ると収穫が多いとのことなので私達の八ヶ岳農場行の計画を変更して泉野へ下ることにする。なおこのパーティは昨25日大ダルミでタカネヒカゲを得たそうである。

7時に赤岳鉱泉を出発する。昨日来からのこの付近での収穫は、ミヤマカミキリモドキを2頭得た以外には特記するものがない。これらは漬上げた新しい薪に夕刻いたものである。脱線であるが昨日通つた行者小屋辺りは、切株や枯木がかなり面白そうでもあるが、時間に追われて充分落着けなかつたのは残念である。前日の項で触れたようにちよつとした採集場所である。

さて柳川北沢を美濃戸へと足を運びだしたが、日は射さない。しかし美しい金緑色のカラカネハナカミキリ始め小型のハナカミキリがたくさんいる。先行者が採集した後でも数分すれば、結構もと通りの種類と数とがどこからともなく花に飛来する。風早氏は写真、植物、昆虫と大活躍である。溪流を右に左にしばらく下るうちカラカネハナカミキリに代つてマルガタハナカミキリが目止まるようになり、ホソハナカミキリ類、ヒメハナカミキリ類も出現するようになるがあまり多くはない。コブヤハズカキキリも管瓶に収まる。8時頃であつたらうか知之少年は栗の死体から美しいシデムシ<sup>\*</sup>を多量にあげる。この頃薄日が射すが蝶は一向に現れない。わずかばかり開けた草原で青<sup>\*</sup>(このシデムシと、前述のハナカミキリは目録を参照されたい。)

野氏はコヒヨウモンモドキの蛹を得る。美濃戸近くなつて雲行きが悪くなりハラハラしながらも、船越氏はヘリカメムシを得て気をよくする。9時美濃戸に到着。ハナカミキリの数は減りムラサキカメムシがアザミに多数見出される。製材小屋の下で日照を得て小1時間ミヤマシロを追う。風早

氏のオ一号を皮切りに新鮮な20頭余の収穫があつたが道の際よりも溪流柳川沿いの逢木帯に多く飛来するようである。この辺りにはウラジキノメ、キマダラヒカゲ、ヒョウモン、コキマダラセセリ等もいる。ここからしばらく下ると八ガ岳農場と泉野とへ至る道の分岐点に出る。この間道が二つに分かれているがどちらを進んだ者にも収穫はあがらない。

分岐点を通過してわずかの地点で正午になり昼食をとる。この頃から急に晴天となり昨日ガスと風の中で通過したいくつかのピークを背景に、雄大な裾野が展開する。この辺りから見た編笠岳の峻線はまことに美しい。行手には南アルプスや雄大な霧が峰が見えかくれする。柳川は道の左方に遠ざかりこの付近から2時間ばかりは水が得られないので美濃戸を通る時に水筒を満たしておかないと苦しまなくてはならない。

この標高は約1400mであるが蝶がちらほら姿を見せはじめ一同元気づく。広大な草本帯を下るうち、小さな翅で滑翔し、水に集り、岩影に身を休める可憐なコヒョウモンモドキが無数に現れる。ヒョウモンモドキ、フタスジ、ヒョウモン等も多数現われ、収穫は急ピッチに上昇する。フタスジ以外は新鮮な個体が多い。カラマツの林にさしかかつた頃、俄雨に会いここで小休止をとる。天気が回復してこの林を過ぎた辺りでヤマキ、スジボソヤマキを追う。前者は後者より数が少ないが共に新鮮な雄も越冬した雌もいる。道の右手に小川があり、その湿地でネットを構えていると確実に来る。この類も蝶道を持つのかも知れない。八ガ岳農場へ至る道との分岐点から一行の足で2時間余の地点であるが、ここはアサマシジミも饒産する。

ここから1時間ばかり下ら下ると道が大きくカーブして、今まで右方に見えていた藝科山や、霧が峰、美カ原も小さな尾根にかくれるようになり上槻木の部落が近くなつて水田も現われる。この辺りではクジヤク、オオミスジ、ヒメシロ、等の収穫があり、獣糞には多数のスジボソヤマキが群つている。青野氏が一挙に12頭ネットに収め大量生産時代の世に背かぬ大量採集をして見せたため、これが先陣争いの発端となる。3時過ぎの真昼の高原での事だ。一帯の獣糞からはツノコガネ他エンマコガネ類も採集する。上槻木の部落に入つてバス停留所に荷物を置き一息ついたのが4時30分である。6時20分のバスに乗るまでの間、再び引返して採集し、オオミスジ、オオミドリ、アオクチブトカメムシを道端の樹木から、水田付近ではヒメシロをあげる。近くの神社には無数のヒョウモンエダシヤクが発生しており、その数に驚く。

6時過ぎバスの人となる。この4日目のコースはネットを振るに忙しいほどであつたが、ベニ、クモマベニは姿さえ見ることができなかつた。もし逆コースをとつて上槻木から赤岳鉱泉へ登つたら、或いはすばらしい収穫があつたかも知れない。又泉野へ至る道も見逃がせない好採地であろう。次の機会には充分にこの辺りの採集を……と考える窓外をオオヒカゲが悠々と飛んで行く。これが八ガ岳最終の蝶であろうと思うと一抹の郷愁を感ずるが、疲れた体に何かしら安堵の気持も湧く。祭にけふる八ガ岳連峰、雄大な霧が峰、そそり立つ南アルプス前衛の山々に見送られてバスは茅野に着く。ここから名古屋へ向かう中央線の列車は、台風五号のためか、比較的楽な席を提供してくれたが一同ただ黙然と座しているのみである。



## 八ガ岳採集品目録

風早保男 船越俊平 青野孝昭

今夏(1957年)7月下旬、25日から28日にわたつて風早保男、風早知之、船越俊平、船越妙子、青野孝昭の5人によつて試みられた八ガ岳採集旅行は、貧弱ながら幾らかの収穫を私達に与えた。ここでは、旅行中得られた採集品の中から現在までに種名の判明したものを列挙して諸兄の参考に供したいと思う。

目録中、カミキリの一部は大林一夫氏と水野弘造氏に、その他の甲虫の多くの群は穂積俊文氏に同定していただいたので記して感謝の意を表す。

## ☆ 凡 例 ☆

- 米 各種は学名、和名、産地、個体数の順に記してある。
- 米 産地の項で記号はそれぞれ地図上で、aは①~③、bは③~④、cは④~⑥、dは⑥~⑧、eは⑧~⑨、fは⑨~⑩、gは⑩~⑬を示す
- 米 個体数の項で+は唯1頭の採集、++は数頭まで、+++は数頭以上の採集で、しかも多数目撃したものを示す。
- 米 科の排列は日本昆虫図鑑(北隆館)に従つた。

## DERMAPTERA 革翅目

## Family Forficulidae ハサミムシ科

*Forficula mikado* Burr キバネハサミムシ e ++

## HEMIPTERA 半翅目

## Family Plataspidae マルカメムシ科

*Coptosam biguttula* Mtschulsky ヒメマルカメムシ a +

## Family Pentatomidae カメムシ科

*Disarcoris lewisi* Distant オオトゲシラホシカメムシ d ++

*E. parrus* Uhler トゲシラホシカメムシ a +

*Carbula humerigera* Uhler トゲカメムシ e ++

*Palomena angulosa* Mtschulsky エゾアオカメムシ a +

*Carpcoris purpureipennis* DeGeer ムラサキカメムシ a ++, e ++

*Brydena rugosa* Mtschulsky ナガメ a ++

<i>Menida violacea</i> Motschulsky	ツマジロカメムシ	a +
<i>Acanthosoma</i> (1) sp.	エソツノカメムシ	e
<i>Dinorhynchus dybauskyi</i> Jakovlev	アオクチフトカメムシ	g ++

Family Coreidae ヘリカメムシ科

<i>Hemecerus dilatatus</i> Horváth	ハラビロヘリカメムシ	a +
<i>Mesocerus marginatus orientalis</i> Kiritschenko	ヘリカメムシ	a ++, e +

Family Lygaeidae ナガカメムシ科

<i>Lygaeus cruciger</i> Motschulsky	ジュウジナガカメムシ	a ++
-------------------------------------	------------	------

Family Cercopidae アワフキムシ科

<i>Lepyronia coleoprata</i> Linné	マルアワフキ	a +, b ++
-----------------------------------	--------	-----------

Family Cicadidae セミ科

<i>Tihicen bihamatus</i> Motschulsky	コエソセミ	a +
--------------------------------------	-------	-----

Family Gyronidae ヒラタヨコバイ科

<i>Penhuma nitida</i> Lehterri	クロヒラタヨコバイ	f +
--------------------------------	-----------	-----

TRICHOPTERA 毛翅目

Family Phryganeidae トビケラ科

<i>Nauonia regina</i> McLachlan	ムラサキトビケラ	a +
---------------------------------	----------	-----

LEPIDOPTERA 鱗翅目

Family Geometridae シヤクガ科

<i>Trichobaptia exsecuta</i> Felder	シロオビクロナミシヤク	e ++
<i>Campyopterus unduliferaria</i> Motschulsky	シラナミナミシヤク	e +
<i>Eulype hecate</i> Butler	サカハチクロナミシヤク	e ++
<i>Abraxas grossulariata conspurcata</i> Butler	スグリシロエダシヤク	a +
<i>Arichanna gischkevitchii</i> Motschulsky	ヒヨウモンエダシヤク	g ++

Family Arctiidae ヒトリガ科

<i>Pericallia matronula sachalinensis</i> Draudt	シヨウザンヒトリ	a +
--	----------	-----

Family *Hesperiidae* セセリチョウ科

<i>Dainio tethys tethys</i> Ménétriès	ダイミヨウセセリ	f ++
<i>Thymelicus sylvaticus</i> Brøner	ヘリグロチャバネセセリ	f +
<i>Ochlodes venata</i> Brøner et Grey	コキコダラセセリ	a++, f++
<i>O. ochracea rikuchina</i> Butler	ヒメキマダラセセリ	a++, f++
<i>Halpe varia</i> Murray	コチャバネセセリ	a++, f++

Family *Pieridae* シロチョウ科

<i>Leptidea amurensis</i> Ménétriès	ヒメシロチョウ	g ++
<i>Gonepteryx rhamni maxima</i> Butler	ヤマキチヨウ	f ++
<i>G. mahaguru nipponica</i> Verity	スジボソヤマキチヨウ	a+, f++
<i>Colias lyale poliographus</i> Motschulsky	モンキチヨウ	a++, f+++
<i>Pieris rapae crucivora</i> Boisduval	モンシロチョウ	a ++
<i>P. melete melete</i> Ménétriès	スジグロシロチョウ	a++, f++
<i>Aporia hippia japonica</i> Matsunura	ミヤマシロチョウ	f ++

Family *Lycaenidae* シジミチョウ科

《目撃》 <i>Artopoetes pryeri pryeri</i> Murray	ウラオマダラシジミ	a +
<i>Favonius orientalis orientalis</i> Murray	オオミドリシジミ	a +
<i>Chrysozephyrus snuraglinus</i> Brøner	メスアカミドリシジミ	a +
<i>Celastrina argiolus ladonides</i> de l'Orza	ルリシジミ	a+, f+
<i>Plebejus argus micrargus</i> Butler	マシジミ	a++, f-#
<i>Lycaeides subsolana yagina</i> Strand	アサマシジミ	f++

Family *Nymphalidae* タテハチョウ科

<i>Brentliis daphne rubdia</i> Butler	ヒヨウモンチョウ	a++, f+++
<i>Argynnis puphia geisha</i> Hemming	ミドリヒヨウモン	a +
<i>Fabriciana adippe pallescens</i> Butler	ウラギンヒヨウモン	a+, f++
<i>Mesoacidalia charlotta fortuna</i> Janson	ギンボソヒヨウモン	a++, f+++
<i>Argyronne laodice japonica</i> Ménétriès	ウラギンシジヒヨウモン	f +
<i>A. rulsana lysippe</i> Janson	オオウラギンシジヒヨウモン	f +
<i>Ladoga camilla japonica</i> Ménétriès	イチモンジチョウ	a++, f++
<i>Kallasia alvina kaemperi</i> de l'Orza	オオミスジ	a+, g
<i>Paroneptis rivularis insularum</i> Fruhstorfer	フタスジチョウ	f ++
<i>P. pryeri pryeri</i> Butler	ホシミスジ	f ++

<i>Mellicta ambigua nippona</i> Butler	コヒヨウモンモドホ	a++ , f++
<i>Melitaea scotosia</i> Butler		f ++
《目録》 <i>Araschnia burejana strigosa</i> Butler	サカハチチヨウ	f +
<i>Polygonia c-album hemigera</i> Butler	シータテハ	a +
<i>Nymphalis xanthamelas japonica</i> Stichel	ヒオドシチヨウ	a++ , f++
<i>Inachus io geisha</i> Stichel	クジャクチヨウ	a++ , f++
<i>Vanessa indica</i> Herbst	アカタテハ	f +
<i>Apatura ilia substituta</i> Butler	コムラサキ	g +

Family *Satyridae* ジャノメチヨウ科

<i>Ypthima argus argus</i> Butler	ヒメウラナミジャノメ	a++ , f++ , g++
<i>Lopinga achine achinoides</i> Butler	ウラジャノメ	c ++
<i>Kirrodesa sicelis</i> Hewitson	ヒカゲチヨウ	f++ , g++
《目録》 <i>Ninguta schrenckii menalcas</i> Fruhstorfer	オオヒカゲ	g +
<i>Neope goschkevitschii goschkevitschii</i> Ménétviès	ヤマダラヒカゲ	a++ , f++

RCOLEPTERA 鞘翅目

Family *Carabidae* オサムシ科

<i>Carabus gracillimus</i> Bates	オンタケクロナガオサムシ	c +
<i>Nebria</i> sp. ( <i>N. ochotica</i> R. F. Sahlberg?)		d +
<i>Argutra</i> sp.		
<i>Colpodes</i> sp.		
<i>Pterostichus</i> sp.		
<i>Peryplus</i> sp.		

Family *Silphidae* シデムシ科

<i>Nicrophorus latifastus</i> Lewis	ヒロオビモンシデムシ	f ++
<i>N. maculifrons</i> Kraatz	マエモンシデムシ	f +

Family *Cantharidae* ジョウカイ科

<i>Thenus cyanipennis</i> Motschulsky	アオジョウカイ	f ++
<i>Athenus suturullus</i> Motschulsky	ジョウカイボン	f ++
<i>Podabrus macilentus</i> Kisemetter	ヒメクビボンジョウカイ	b+ , d+ , f+
<i>P. temporalis</i> Harold	ウスイロクビボンジョウカイ	b+ , d+ , f+

## Family Lycidae ベニボタル科

<i>Dictyoptera elegans</i> Nakane et Winkler	クロバヒシベニボタル	f ++
<i>Macrolycus flabellatus</i> Motschulsky	クシヒゲベニボタル	d +
<i>Mesolycus atrorufus</i> Kiesenwetter	ホソベニボタル	f ++
<i>Aplatopterus lineatus</i> Gorham		a +, f ++

## Family Lampyridae ホタル科

<i>Pyrocoelia fusosa</i> Gorham	クロマドボタル	a +
---------------------------------	---------	-----

## Family Byturidae キクスイムシモドキ科

<i>Byturus affinis</i> Reitter	キクスイムシモドキ	d ++
--------------------------------	-----------	------

## Family Nitidulidae ケシキスイ科

<i>Cychnus lawisi</i> Reitter	キイロセマルケシキスイ	d ++
-------------------------------	-------------	------

## Family Coccinellidae テントムシ科

<i>Epilachna vigintioctanaculata</i> Motschulsky	オオニジュウヤホシテントウ	a +
<i>Propylaea japonica</i> Thunberg	ヒメカメノコテントウ	f +

## Family Elateridae コメツキムシ科

<i>Crepidophorus montanus</i> Miura	ミドリツヤハダコメツキ	d ++
<i>Athous secessus</i> Candèze	クロツヤハダコメツキ	d ++
<i>Ectinus cericeus</i> Candèze	カバイロコメツキ	f ++
<i>Denticollis varicolor</i> Lewis	メスグロホタルコメツキ	d +
<i>Paracardiophorus pullatus</i> Candèze	コハナコメツキ	b ++

## Family Lagriidae ハムシダマシ科

<i>Althracra viridissima</i> Lewis	アオハムシダマシ	f ++
------------------------------------	----------	------

## Family Tenebrionidae ゴミムシダマシ科

<i>Plesiophtalmus nigrocyanus</i> Motschulsky	キマワリ	f +
---	------	-----

## Family Oedemeridae カミキリモドキ科

<i>Xanthochroa katoi</i> Kôno	カトウカミキリモドキ	a +, f ++
<i>X. waterhousei</i> Halold	アオカミキリモドキ	b +, f ++
<i>Ditylus laevis</i> Gebler	ミヤマカミキリモドキ	e +, f +
<i>Chrysarthia viaticae</i> Lewis	スジカミキリモドキ	a ++, f ++
<i>Oedemeronia manicata</i> Lewis	キアシカミキリモドキ	a ++, f ++

## Family Serropalpidae ナガクチキムシ科

*Phlocotrya bellicosa* Lewis オオクロホソナガクチキムシ b +

## Family Mordellidae ハナノミ科

*Mordella aculeata* Linné クロハナノミ

## Family Pyrochroidae アカハネムシ科

*Pseudopyrochroa vestiflua* Lewis アカハネムシ a +

## Family Chrysomelidae ハムシ科

*Orsodacne arakii* Chûjô クロナガハムシ a +  
*Clytra laeviuscula* Ratzeburg ヨツボシサルハムシ a++, f++  
*Gynandrophthalma aurita* Linné キボシルリハムシ a +  
*Basilepta balyi* Harold チャイロサルハムシ a +  
 B. *fulvipes* Motschulsky アオパネサルハムシ a +  
*Cryptocephalus fortunatus* Baly キアシルリサルハムシ b +  
 C. *inurbarus* Harold セスジルリサルハムシ b +  
*Chrysolina aurichalea* Mannerheim ヨモギハムシ f +  
*Gastrolina thoracica* Baly クルミハムシ a +  
*Phytodecta rufipes* DeGeer トホシハムシ f ++  
*Galeruca extensa* Motschulsky アザミオオハムシ a++, f +  
*Gallerucida bifasciata* Motschulsky イタドリハムシ a ++  
*Huperus nipponensis* Laboissiere ヒゲナカウスバハムシ b++, d++, f +

## Family Cerambycidae カミキリムシ科

*Monochamus subfasciatus beloni* Pic ベロンヒゲナガカミキリ e +  
 M. *nitens* Bates シラフヒゲナガカミキリ e +  
*Purpuruenus spectabilis* Motschulsky ヘリグロリンゴカミキリ a +  
*Pterolophia zonata* Bates アトジロサビカミキリ e +  
 P. *japonica* Breuning エゾサビカミキリ e +  
*Asaperda agapanthina* Bates シナノクロフカミキリ e +  
*Xylariopsis mimica* Bates クビジロカミキリ e +  
*Anoplophora mulariana* Thomson ゴマダラカミキリ a +  
*Mesechtkistatus* n. sp. コブヤハズカミキリ—新種 e +  
*Paraclytus excultus* Bates シロトラカミキリ e +

<i>Aralolpona scotodes</i> Bates	ツヤケシハナカミキリ	
<i>scotodes</i> Bates		e ++
<i>M. niponensis</i> Pic		e ++
<i>M.</i>	型名未命名のもの	e +
<i>Strangalomorpha tenuis</i> Solsky	アオバホソハナカミキリ	e ++
<i>Stragulia nymphula</i> Bates	ニソフハナカミキリ	e ++
<i>Allosterna tabacicolor</i> DeGeer	ホクチチビハナカミキリ	
<i>m. fusca</i> Matsushita		e ++
<i>m. bivittis</i> Motschulsky		d +
<i>Judolia cornetes</i> Bates	マルガタハナカミキリ	
<i>cornetes</i> Bates		e ++
<i>m. multinotulata</i> Tanawuki		e ++
<i>Gaurotus doris</i> Bates	カラカネハナカミキリ	d++ e+++
<i>Pseudallosterna misella</i> Bates	チャボハナカミキリ	e ++
<i>Etorofus vicaria</i> Bates	フタスジハナカミキリ	e ++
<i>Leptura aethiops dimorpha</i> Bates	ムネアカハナカミキリ	e +
<i>L. arcuata mimica</i> Bates	ヤツボシハナカミキリ	e ++
<i>Toxotinus reini</i> Heyden		e +
<i>Pidonia debilis</i> Vraatz	チャイロヒメハナカミキリ	e ++
<i>P. miyui</i> Matsushita	ミワヒメカミキリ	
<i>P. maculithorax</i> Pic	カクムネヒメハナカミキリ	e ++
<i>P. grallatrix</i> Bates	オオヒメハナカミキリ	e +
<i>P. ruficollis</i> Matsushita	ヘリモンヒメハナカミキリ	e ++
<i>P. semiobseura</i> Pic	ホソガタヒメハナカミキリ	e +
<i>P. insuturata</i> Pic	ヨコモンヒメハナカミキリ	e ++
<i>P. puziloi</i> Solsky	フタオビノミハナカミキリ	b+, d++, e+++
<i>P. n. sp.</i>	ヒメハナカミキリ—新種	

Family Curculionidae

<i>Chlorophanus grandis</i> Roelofs	オオアオゾウムシ	a +
<i>Phyllobius annectens</i> Sharp	ミヤマヒゲボソゾウムシ	f +
<i>Lixus impressiventris</i> Roelofs	カツオゾウムシ	a +
<i>Larinus latissimus</i> Roelofs	ゴボウゾウムシ	a +
<i>Raris reini</i> Roelofs	シラホシメヒゾウ	a ++
<i>B. sp.</i>		
<i>Ixabna sp.</i>		

<i>Apoderus rubidus</i> Motschulsky	ウスアカオトシブミ	a +
<i>Byctescus regalis</i> Roclofs	ドロハマキチヨツキリ	a +
Family Lucanidae      クワガタムシ科		
<i>Macrodercus rectus</i> Motschulsky	コクワガタ	a +
Family Scarabaeidae      コガネムシ科		
<i>Liatongus phanaeoides</i> Westwood	ツノコガネ	g ++
<i>Onthophagus ater</i> Waterhouse	クロマルエンマコガネ	g +
<i>Caccobuis jesscoensis</i> Harold	マエカドコエンマコガネ	g +
<i>Aphodius</i> sp.		g +
<i>Mimela flavilabris</i> Waterhouse	ヒメスジコガネ	a +, b +
<i>M. costata</i> Hope	オオスジコガネ	a ++
<i>Phyllopertha orientalis</i> Waterhouse	セマダラコガネ	a ++
<i>P. pallidipennis</i> Reitter	ウスキイロコガネ	a +
<i>Serica grisea</i> Motschulsky	ハイイロビロウドコガネ	a +, f +

注 (1) *Pidonia* n. sp. は現在大林一夫氏の手許にある。

注 (2) *Mesechthistatus* n. sp. は、最近林匡夫氏によつて発見された一種であるが、くわしいことがわからないので学名は目録のようしておく。

## 明治後期における岡山の昆虫相を知る 為の一資料の紹介

青野孝昭

岡山県の蝶相に関する文献目録及び解説(1)と題して、かつて、広瀬義躬氏が本誌4(1)へ岡山県の蝶相に関する文献15編をまとめて解説されたことは記憶に新しい。岡山県産蝶類目録再編の気運が高まっている現在、この種の過去の業績を知ることは極めて必要なことのように考えられるが、明治から大正にかけての業績は現在のわれわれにあまり知られていないように思われる。幸なことに、従来から稀観書とされていた「博物之友」の一部が岡山大学の安江安宜先生の御尽力によつて、岡山大学大原農業生物研究所図書館に備えつけられ、明治後期における岡山地方の昆虫相を知る上に極めて重要と思われる三編の報文に目を遇す機会を与えられたので、ここに、それらについて紹介させていただきたいと思う。

本文にはいるに先立つて「博物之友」閲覧の機会を与えられた安江安宜先生に厚く感謝の意を表



します。

1) 佐武正一(1906):岡山の昆虫界、博物之友34 p. 279

1906年といえは明治39年、今から約50年前の著作である。佐武正一氏は日本全国各地の鉄道建設に多大の業績を残された人だが、蝶の収集でも、その量の多い点で恐らく日本一であろうとさえ言われ、残された標本と文献は東京科学博物館に寄贈されて、日本の蝶学の上にも貢献されることの多かつた人。生れは岐阜県大垣市だが高校時代は岡山の才六高等学校で学ばれた。

「余の岡山に行きしは二年前なるが、当時六高には昆虫学に志すものなく……」という書き出しの文章は親しみ深く、来岡当時は同好者が少なかつたのに、1年前に昆虫専攻の鈴木一郎氏、大渡理学士が来られ、また、その年の夏には日本博物同志会幹事の松村巖氏が二部乙類に入學されて、岡山の昆虫界がが然活況を呈して来たことが喜ばしげに報じられている。

「(是に稍面白き事柄は、年森良太とて飲食店主あり頃日始めし許りなるが、非常の昆虫熱心家にて、禿頭を抱え尻端折りにて、捕虫網を手にし、採集に出掛くる其スタイルの奇なる、其熱心の猛くべき頗る驚嘆に値すべきものあり)」といった軽妙な記事によつて当時の風俗までうかがい知ることができるのも愉快である。

ついでに、今迄に当地で得た蝶を記しておこうと、46種の蝶が挙げられているが、参考迄にここにその全部を原文の儘再録すると次のようである。

棒蝶科 モンキアゲハ、キアゲハ、アゲハ、ヨナガアゲハ、クロアゲハ。

粉蝶科 ツマキテフ、キテフ、フツネンテフ、モンシロテフ、スヂグロシロテフ。

斑蝶科 アサギマダラ。

蛭蝶科 キタテハ、アカタテハ、ルリタテハ、ヒメアカタテハ、ヒラドシテフ、ウラギンヘウモン、ウラギンズヂヘウモン、メスグロヘウモン、リョクシヨクヘウモン、ツマクロヘウモン、コムシテフ、ホンミスヂ、イチモンジテウ、コムラサキ、ゴマダラテフ。

蛇目蝶科 コジャノメ、ヒメジャノメ、ヒカゲテフ、クロヒカゲ、キマダラテフ、ジャノメテフ、ヒメウラナミジャノメ。

小灰蝶科 ウラナミンジミ、ムラサキシジミ、ルリシジミ、ヤマトシジミ、ベニシジミ、ツバメシジミ、ウラギンシジミ、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミヅイロヲナガシジミ。

絹蝶科 オホチャヤマダラセ・リ、オホチャパネセ・リ、キマダラセ・リ。

2) 鈴木一郎・佐武正一(1907):岡山県産虫報(一) 博物之友40 151—152

3月5日、快晴の日曜日を迎え打連れて吉備郡の高松町に赴いた二人は、同所の県立農学校と農事試験場を訪問、そこの昆虫標本を調べて主として蝶ととんぼについて紹介している。

農事試験場には流石に標本多かりき、と期待通りであつたことが述べられ、まず蝶について、博物之友34号に載せたもの以外にチャコウアゲハ(高松附近)、ヒメヒカゲ(同)、オホウラギンヘウモン(同)、タモガタヘウモン(同)、コチャパネセ・リ(同)、ミドリシジミ(同)、ヘウモンモドキ(県下赤磐郡郷部村)、クロシジミ(同)、オホミドリシジミ(同)、コツバメ(同)、スヂグロチャパネセ・リ(同)、アオバセ・リ(阿哲郡)、ダイメウセ・リ(真庭郡)等があつた

と記されている。これらのうち、スジグロチヤバネセ・リについては、近縁のヘリグロチヤバネセセリであつたかも知れず、疑問の残る種であるが、他の種の同定には間違いはないものと思われる。

その他として、オホシモフリスマメ(赤磐郡)、エダナナフシ(高松附近)、ナナフシ(同上)、ツノトンボ、キバネツノトンボ(共に高松産)があつたと述べられている。しかし、カミキリには珍種もあり、その種類も豊富、ハバチ標本もまた若干あるが名称を知らない為、記すに由なしとことわっている。

トンボ類については岡山産蜻蛉類の一端をうかがうに足るべきかとして、次のように27種を列記している。

ギンヤンマ、サナヘトンボ、ノシメトンボ、シホカラトンボ、シホヤトンボ、ハラビロトンボ、ナツアカネ、セウセウトンボ、テフトンボ、ハツテフトンボ、ヒメヤマトンボ、トラフトンボ、カトリトンボ、コヤマトンボ、オホヤマトンボ、コヲニヤンマ、ヤプトンボ、ハグロイトトンボ、オホシホカラトンボ、ミヤマアカネ、イトトンボの一種(銅色の体を有するもの)、キイトトンボ、モノサシイトトンボ、コシアキトンボ、アラハダトンボ、カワトンボ、ベッコウトンボ。

かな使いの違いや、和名が現在と違っているもののあることは蝶の場合と同様である。

次に農学校については「標本は余り多からざりしが、整理は甚だ匪く行き届き、殊に其大部分は皆購入品にあらずと言ふ。」といつたところに力を入れている。ここで新たに認められたものとしてホソバセセリ、ヒメキマダラセセリ、シジミテヨウ一種\*及びトゲナナフシ(35年8月10日採集)を挙げ勿論これらは付近の採集品であることわられている。

最後に、ついでに今春の獲物を記さんに、として、4月13日岡山水源地付近(岡山より約一里)にてシーモンタテハを得、続いて19日岡山より二里余りの金川方面へ採集した時はシーモンタテハは認めなかつたが、コツバメ、ルリタテハ、テングチョウ、ヒメウラナミジヤノメ等を得たと記されている。

シーモンタテハ、即ちシータテハが岡山水源地付近で得られたということは現在では奇異に感ずるが、軽々しく否定もできない。注目すべき記事である。

### 3) 鈴木一郎(1908):岡山市付近の昆虫 博物之友56 271-274

鈴木一郎氏は、名古屋生れの人で、岡山の六高に來られてからは、佐武氏と親友になり面白く採集して暮されたらしい。佐武氏が東京帝大へ進まれてからは一人で岡山の昆虫を採集されたのであろう。岡山を去るにあつては、やはり当地に愛着を覚えられたらしく、「毎年帰心矢ノ如ク試験ノ終ルヤ飛ブガ如クニ掃リシ余モ今年ハ流石ニ岡山ノ見納メカト思ヘバ何トナク名残り惜ク二十日余リヲ彼地ニ暮シヌ。」と書かれた。氏の六高在学3年間の見聞をまとめて記載されたのがこの報文であり、われわれには貴重な資料となる。特に、ウラジロミドリシジミとグンバイトンボに関する記載は興味深いものがあり、その他主として蝶に関する観察事項も注目に値する。

「特筆大書スベキハうらしろしどみノ岡山市ノ南方ニ突出セル児島半島ニ産スル事ナリ。」で始

\* 後に発表された鈴木一郎氏の報文によつて、この蝶がウラジロミドリシジミであつたことは間違いない。

まるウラジロミドリシジミについての記載をみよう。

まず、1年前、佐武氏と農学校で見たシジミチヨウ1種が、北海道に産するウラジロミドリシジミに違いないことが、佐武氏によつて明らかにされたこと、そして、その標本には採集年月日が付されてはいるが付近から農学校生徒によつて採集されたとの説明に氏が未だ半信半疑でいたことが述べられ、次いで次のような感激に満ちた記載がなされている。

「恰モヨシ今年ノ六月ノ三十日ノ兒島半島ノ採集ハ此レガ正当ナル解決ヲ与ヘタリ、此日天気晴朗三蟠ヨリ鏡ノ如キ兒島ノ湾口ヲ横切ニテ飽浦ニ達シ金甲山ニ向フ、此山ハ兒島半島最高ノ山ナリ高サ千尺位ト称ス、山中クぬぎノ茂林アリ、大変あかしじみ、うらなみあかしじみ多シ、時ニみどりしじみニ近キ形ノ蝶ノ谷望メル枝ノ葉上ニ翅ヲタミテ止リ居ルヲ見タリ、サレド網ノ柄ハ短シ下ニハ音遠ク聞ユル深谷アルヲ如何セン、熟考ノ後運ヲ天ニ任シテ石を彼レニ投ゼンニ彼レハ不運ニモ目前ノ葉上ニ閃一闪ノ後止リタリ、即座ニ網ヲ以テ抛スレバ之レナンうらしろしじみノ子ナリ、余欣喜禁ズル能ハズ、尚三時間余ヲ費シテ茂林ヲ搜リテ四頭ノ雌ヲ採集シタリ、此処ニ於テ此地方ニ此種ノ産スルノ誤ラザルヲ確メタリ」

昨年(1956)の6月10日、若林氏によつて採集されたウラジロミドリシジミ1♀の記録が金甲山における最初のものと思つていたわれわれには、49年も前に、かくも感激的な記録がなされていようとは想像もつかなかつたことである。

なお、同日他にスジグロチャバネセセリ多数とミドリシジミ、オオミドリシジミ、ウラナミジヤノメを採集し、キハダカノコ多数を目撃したことが記されているが、スジグロチャバネセセリの記録は疑わしく思われる。恐らく最近も多く採集されているヘリグロチャバネセセリのことだろうと考えられる。

次に問題となるのはグンバイトンボの記録であろう。この記録は安江先生によつて掘出され充分生かされたことは周知の通り。今年の6月に友野良一氏によつて再確認され、新聞紙上ににぎわしたことはあまりにも卑近なニュースである。

鈴木氏は7月3日に閑谷へ行かれていた。閑谷は夏といえどもウグイスの鳴音を耳にし得、命の延びる程閑雅であり、東京の井の頭公園で初めて捕えられたグンバイトンボの産地として名があるといつたことが記されている点、それ以前、少くとも1年以上前に誰かによつて閑谷でグンバイトンボが得られていることが察せられる。

「此レノ採集ヲ目的トシテ余ハ出掛ケタリ、此日同行セン岡山高等小学校ノ教員水島氏ト汽車ニ乗りテ和氣駅ニテ下車シ街道ニ沿フテ藤野ニ至リ或ル森ニテ休息セリ、此森ニくんばいとんぼ居ラズヤト搜索センニ幸ニモ二三頭ヲ得タリ尚目ヲ皿大ニシテ見廻ハセシニ可ナリ多クヲ発見シ大ニ愉快ナリキ、蓋シ余ハ今度初メテ此いとんぼヲ採集シタリナリ、尚進ンデ午後閑谷ニ到着セリ、此処ハ定メテくんばいとんぼ居ルベシト思ヒシニ僅ニ二頭ヲ得シノミニテ大ニ失敗シタリキ、之レハ毎年ノ乱採ノ結果ヲ減少センニ非ズヤ。」

原文でわかることは従来より名高かつた閑谷よりも途中の藤野の或る森の方に沢山のグンバイトンボの認められたことで、友野氏の藤野付近一帯の吉井川支流における記録と合せて面白いこと

だと思われる。

なお、関谷でもスジグロチャバネセセリを記録したことが記されているが、これもヘリグロチャバネセセリではなからうか。

その他、蝶の観察では、面白いこととして、ホンミスジが5、6月頃岡山市中の到るところに多いこととか、まれな蝶はミドリヒヨウモンであつて、一層珍奇なのはツマグロヒヨウモンであり、それよりも更に少くこの地方では奇品に属するものはクモガタヒヨウモンであるといつたことが述べられているが、詳細は省略させていただく。トンボでは市の東方の池の到るところに5、6月頃ヨツボシトンボが多いことや、9月の上旬にタカネトンボ♂を得たことなどが記載されている。

\*\*\*\*\*

理化学器機 光学器機  
 度量衡 計量器 採集用具

平田光学器機店

岡山市中之町二七  
 電話 ②局 5474

理化学器機  
 生物・地学標本模型  
 昆虫採集用具  
 テレビ・ラジオ・真空管  
 島津製作所岡山県代理店

サカエ商会

倉敷市栄町(赤木病院西)電話913番

昆虫・植物採集用具  
 理化学器機

岡山市西中山下(柳川交叉点東)

永瀬教育堂

電話 ② 4725番

昆虫の月刊雑誌  
 北隆館 発行

新昆虫を読みましょう!

倉敷市阿知町TEL. 126



おとしぶみ

---

冬至の日にムラサキシジミ

---

1957年12月22日、うららかな日曜日のひるさがり、庭の手入れにうさをまぎらわしていたところ、ふと気がつくとうらのムクノキの大きな幹にムラサキシジミの新鮮無傷のやつが1匹とまっている。師走には珍しい汗ばむような陽光をあびて翅の紫色が眼にしみるようだ。無駄とは思つたが網をとりに入っているうちに見失ってしまった。すぐそばには旧火薬庫の防火用として植えてあるカシノキの林があるのでこゝから羽化したのではなからうか!

(岡山市津島 安江生)

---

神庭の滝の甲虫二種

---

1、甲虫の標本を整理していたら、VI-12 (1954)に *Craspedonotus tibialis* Schaum オサムツモドキを神庭の滝で得ていたので報告しておく。

2、同じVI-12(1954)に *Hylochaeres hamardi Fleutiaux* オニコメツキダマシも採集していたので併せて報告しておく。

(船越俊平)

本会宛寄贈誌目録

- 1、トンボ類概説，朝比奈正二郎，P. 16：1951. 松井一郎
- 2、*Odonata* 2，P. 5：1957. 松井一郎
- 3、蛾類同志会通信7，P. 6：1957. 蛾類同志会
- 4、蛾類同志会通信8，P. 6：1957. 蛾類同志会
- 5、蛾類同志会通信9，P. 16：1957. 蛾類同志会
- 6、蛾類同志会通信10，P. 20：1957. 蛾類同志会
- 7、*New Insect* 2(3)，P. 28：1957. 北信昆虫同好会
- 8、北信昆虫1，P. 1：1957. 北信昆虫同好会
- 9、南宇和昆虫同好会会報4，P. 30：1957. 南宇和昆虫同好会

## ~~~~~ 編 集 後 記 ~~~~~

神武以来と明るい希望にあけた今年。それが移り移つて人工衛生  
 打上げをファイナーレに、はや終ろうとしています。そうした動きの  
 中で、“私の現在”特集の7巻1号以来、本号までの“すずむし”  
 は私達のこの1年の歩みをしるしてきました。“すずむし”のどの  
 ページからも私達の活動の一端がうかがえます。しかし、なお、私  
 達は本当に自分達の歩みを“すずむし”が反映し切つているという  
 満足を得ていません。

来たる年には、“すずむし”が今以上に私達と密接なものになる  
 よう努力してゆきたいと思います。

——— 編 集 子 ———

すずむし	7巻才4号	昭和32年12月31日	印刷
		昭和32年12月31日	発行
編集兼 発行者	岡山大学大原農業生物研究所 害虫部才2研究室内		
倉敷昆虫同好会			
印刷所	岡山市内山下30ノ5	鳥城騰写堂	